

腹部血管造影法における iohexol は、イオン性造影剤と比較して、造影能が低下することなく、より安全に使用することが可能と考えられる。

5) 副甲状腺機能亢進症における静脈血サンプリングの意義

加村 毅・木村 元政 (新潟大学) 放射線科  
 酒井 邦夫  
 山岸 広明 (新潟県立中央病院) 放射線科

1988年1月から10月までの間に6例の原発性副甲状腺機能亢進症に対して静脈血サンプリングを施行した。全例手術され、全て単発の腺腫であった。上縦隔に病変のあった1例を除き、サンプリングにて全例患側を診断し得、患側の甲状腺の上部か下部かについても4例で示し得た。このうち2例は他の画像診断にて病変を指摘できなかった。本法は各甲状腺静脈の間に吻合が多いため、採血した静脈の灌流域を厳密には決定できない。しかし手技的にはそれほど難しくなく、静脈穿刺ですむため侵襲も比較的少ないことから、他画像にて局在診断の困難な症例では積極的に用いていくべき検査法と考えられた。

6) 内分泌腫瘍(副腎・副甲状腺)のMRI診断

武田 正之・片山 靖士 (新潟大学) 泌尿器科  
 玉木 信・高橋 等  
 木村 元彦・片桐 明善  
 木村 元政・佐藤 玲子 (同放射線科)  
 西原真美子  
 高橋 栄明 (同整形外科)

褐色細胞腫8例、副腎皮質癌1例、副甲状腺腺腫2例に対して、MRI (Magnetom 1.5tesla)、CT、US、RIを施行し、手術所見、組織学的所見と比較した。褐色細胞腫は、T1強調像で低信号、T2強調像で高信号、プロトン密度像で中程度の信号強度に描出され、正常副腎はT2強調像では低信号であった。副腎皮質癌も褐色細胞腫と同様の所見を呈したが、T2強調像で組織学的悪性度の違いを描出し得た。副甲状腺腺腫は眼球用表面コイルを用いることにより、T1強調像で低信号、T2強調像で高信号に描出され、CT、USを上回る診断能が期待されるが、リンパ節も同様の所見であり、パルス系列等に何等かの工夫が必要と思われる。

7) 先天性心疾患診断におけるMRIの有用性について

木村 元政・孟 繁琪 (新潟大学) 放射線科  
 伊藤 猛・酒井 邦夫

先天性心疾患の形態診断におけるMRIの有用性について、汎用画像処理装置MIP-MRによるリアルタイム連続画像表示及びグラジェントエコー法によるシネモード撮影について検討した。スピナーエコー法体軸横断像・矢状断像・冠状断像をMIP-MRで連続表示することにより、単心室・両大血管右室起始などの複雑心奇形において心房・心室・大血管の位置関係や連続性が判かりやすくなった。シネモード撮影では、心室中隔欠損の短絡、エプスタイン奇形の三尖弁逆流などが検出可能であった。X線被曝がなく、造影剤を使用せずに心大血管壁と内腔とを分離でき、任意の断層像が広い範囲で観察できることから、特に大動脈縮窄や動脈管開存など大血管異常を伴う複雑心奇形の診断に心エコー法の補助診断法として十分用いられていくと考える。

8) 出血性転移性脳腫瘍の3例

村上 直人 (県立がんセンター) 脳神経外科

転移性脳腫瘍からの出血の頻度は0.5~14%で、gliomaの出血頻度とはほぼ同程度と報告されている。CT導入以降出血の診断は容易になったが、転移性脳腫瘍の出血を早期に診断するのは必ずしも容易ではない。最近3例の出血性転移性脳腫瘍を経験し、CT所見を中心に報告した。また腫瘍の種類、出血機序、促進因子、治療等にも文献的考察を加えた。

第1例は、脳室内出血で発症した80歳の腎癌。第2例は多発性脳内出血を認めた62歳の肺癌で、出血を繰返した症例。3例目は、手術適応検討中にくも膜下出血を伴う脳出血を来した63歳肺癌である。全例原発巣診断が先行していた。2例に高血圧の既往があったが、出血性素因は認められなかった。CT上全例で造影剤増強効果を見たが、多発性病巣を認めたのは第2例のみであった。当科での出血の頻度は6.4%であった。

以上の経験から、転移性脳腫瘍のCTでは必ず造影前後のCTを施行すべき事を強調した。